

せたかむい

発行 古平町史編纂室
文化会館 842-2590
第194号 平成17.11.1

年表で読む

古平の歴史

《100》

果樹園芸

リンゴ ②

■リンゴの名前

リンゴという名前はわりと新しく、日本では林檎と書いてリンキンとも言っていた。中国からきた名前では苹果（へいか）である。日本でも苹果と書いてリンゴと読んでいた。そのままだけいかとも読んでいた。リンゴの本場でもある青森県にはリンゴを専門に研究している県立苹果試験場がある。

■リンゴの来た道

日本にも昔からワリンゴ（和林檎）といわれる野生に近いものがある。

つたが、明治以前にわずかだが外国から入って来たリンゴも合わせて林檎といっていた。

リンゴは地図にあるコーカサス地方の野生リンゴが改良されて、現在のようなリンゴになったといわれている。

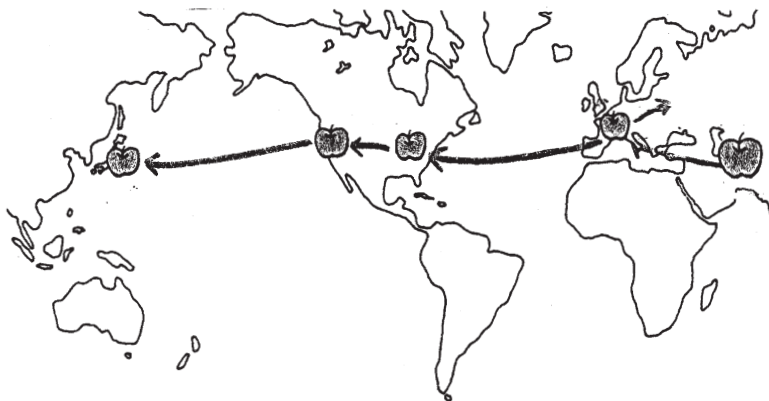
ヨーロッパではリンゴ酒の原料にすることが多かったというが、イギリスでは果実として大変好まれたそうである。日本は江戸時代の終わり頃にも外国から入って来たが、本格的に輸入されたのは開拓使が置かれてからのことである。

■リンゴの品種名

アメリカから入って来たリンゴには英語の品種名がついていたが、当時は英名ではわかりにくく面倒

だったので、受けつけ順に番号をつけ、品種名の代わりにその番号で呼ぶことにした。一〇〇種以上の品種が輸入されたというが、経済的にも北海道に適したのは一〇数種であった。

その後、番号のほかに地方によっては新たに品種名をつけて呼ぶと



→リンゴが伝わって来に道

ころもあり、混乱するようになるともなってきた。それで関係者が協議をし全国で共通の品種名にした。『高野名幸作日記』にもひんぱんにリンゴの品種名が番号で出てくるが、それらを整理すると次ぎのようである。

番号	和名	英名
6号	紅玉	ジョナサン
9号	青龍	ホワイティピン
12号	紅紋	ファミウス
13号	白	
14号	祝	サマーペアメント
19号	緋の衣	キング
24号	君ヶ袖	ノーザンスパイ
33号	緋の衣	オートレー
49号	国光	ロールス
58号	紅魁	レッドアストラカン
赤3号	宝玉	ハーバードストン
阿部7号	倭錦	ベンダビス
砂糖リンゴ	甘露	トルーマン
		スイート

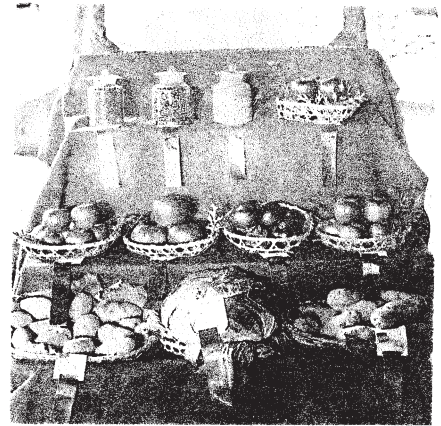
■リンゴ栽培の推移

古平には早くからリンゴの苗木が入り、その栽培法もわからないままに植えられていたが、当時としては珍しいリンゴの果実がよく実り、その市場価値も認められるように

なり、明治三六年、札幌区元札幌農学校で開催された北海道果実品評会にて、浜町中村利一郎のリンゴ「紅玉」が二等賞に入賞した。この品評会では、果樹園で栽培している種類、植付けや整枝の状況、病虫害の防除などの実態を実地調査した上で、出品した果実の形状、大小、色沢、品質、病虫害などについて審査が行なわれた。

リンゴは従来の畑作物にくらべて収入が多く、古平の土地や氣候がその栽培に適していたこともあって、栽培面積も著しく増加した。それにもなつて栽培の方法も次第に向上していったが、

←古平町農産物品評会大正八年



大正時代になると病虫害による被害が増え、その防除が充分でなかったことから果樹全体の生産額が急激に落ちていった。

明治三十七年には町内で、品

種名は不明だが苗木が次のように販売されている。

石井豊太郎 四〇〇〇本
本間太郎右衛門 六〇〇本
佐藤勇次郎 四〇〇本

■リンゴの輸出

リンゴは道内はもちろん新潟・富山などへも送られていたが、明治三六年頃、当時、リンゴの主産地になっていた余市から、古平産のリンゴもロシアに輸出されていた。北海道産のリンゴはやや固いという難点があったが、それが逆に輸送や長期の貯蔵にも耐えるという長所になり、小樽港を経て樺太などへも盛んに移送されていた。

ていた。

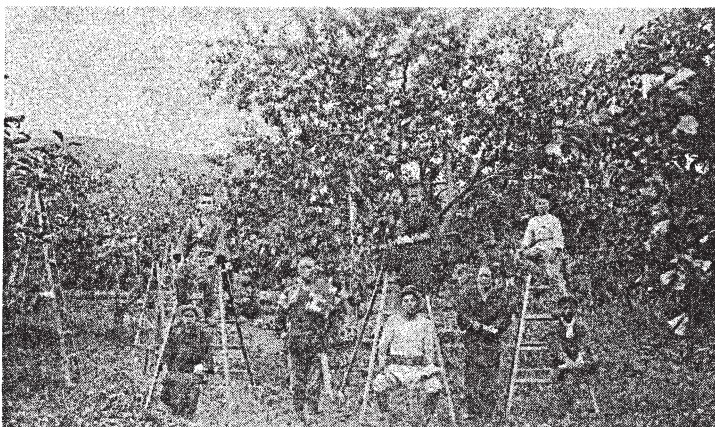
このことについて浜町中野雅栄の談話がある。

「古平のリンゴは日露戦争後の明治三九年から、ウラジオストックへ輸出するようになった。

品種は赤龍一号、倭錦(阿部七号)、国光(四九号)のよ

うに固い質のものが多かった。リンゴ箱六貫入り(二・五キ)を天秤で担いで畑から海岸まで、何人も並んで運んだ。川崎船で小樽へ直航し、明治四二年は最高の輸出量であった。ロシアが輸出を規制したため四三年は半分に減り、大正八年にはついに皆無の状態になった」

←浜町 困高野リンゴ園



大正一三年 一 続

▼六月三日

起床六時、この頃では早起きだ。店は閑散、学校では六日が運動会だというので子供等は一生懸命だ。呉服屋では売り出しだが、この不景気ではさらに振るわぬとのことだ。銀行へ行き、中川へアバ縄代七〇〇円を送金した。

▼六月四日

昨夜来の雨、今朝になってやや晴れ間がでてきた。妻は明後日が節句と運動会だということで、金子おつかさんと竹の子、ワラビをとりに行く。雨降り後で露もひどいだろう。高太郎さん夫婦が今日余市から来るというので、私は本陣の浜へ迎えに出る。一一時半の外浜丸で着いた。新夫人とは初めて会ったが、おとなしそうで器量もよい人だ。縁というものは実に不思議なものだ。幸治から手紙が来る。去る一〇日、札幌へ中等学校運動会の応援に行き愉快であつたとのこと。火防宣伝活動写真があるのでピラ書きを頼まれる。夜、上田新蔵さんの通夜に行き、一〇時帰る。

▼六月五日

明日は節句と運動会だ。台所では昼食のご馳走作りの準備をしている。高太郎さんの夫人も一生懸命に手伝いをしている。私は昨日頼まれた火防宣伝のピラ書きだが、これもなかなか大変、海産物の下落はますます甚だしい。胴鯨一、六〇〇円、鯨粕二、四〇〇円、身欠一〇円程の相場で一般に人氣がよくない。坂本安蔵への上半期分の勘定一、八〇〇円余りあるが、一、よかつた。

高野名幸作さんの日記から

《105》

当時の世相を見る

〇〇〇円だけ送金した。

▼六月六日

就寝中の四時頃、号砲一発、中天にとどろく音だ。今日は小学校運動会だ。子供等は五時頃から起きて準備に忙しい。前を通る子供らも皆愉快そうに登校している。曇り空だったが、次第に晴れて上天気になった。妻、コノさん等は、ユキちゃん、四郎、悦三等を連れて、昼食のご馳走を持ち見物に行く。台

▼六月七日

起床六時、天気快晴、介姉さんから電話があり、妻に竹の子、ワラビをとりに行かないかとのこと。早速承知の返事をし、熊さん等も加わり一行六名連れた。店はポツポツ入金があり、一八〇円余りある。先日来の火防宣伝のピラを今日も書く。全部で五〇枚もあるのには閉口した。佐渡平へ、高太郎さんの嫁さんが家に来ていることを知

らせる。嫁さんの実家にも知らせた。妻等は三時頃帰つて来たが、たくさんとつてきた。重助大工さんが来て、台所の流しをつける。

▼六月八日

今日も快晴、六時起床、今日は竹の子、ワラビとりに誘われて山へ行く。高太郎さん、コノさんと私の三人にカおつかさん、まきさん外、一行八名だ。泥の木の山でワラビとり、近藤の畑で昼食をとる。のち対岸へ川を渡り笹やぶに入る。大きな竹の子がニヨキニヨキとたくさん出ている、おもしろいこと。風呂敷やふところにまで入れる。二時頃、近藤の小屋に戻る。あちこちプラプラ見ながら四時家に帰った。近來にない運動になった。畑ではスモモが花盛り、泥の木方面ではあちこちで水田造成が盛んだ。清浦内閣総辞職の号外が出た。

▼六月九日

起床六時、今日も天気快晴、昨日は青物とりに行きずいぶんおもしろかった。殊に竹の子はよいものがたくさんとれたので愉快であつた。まだたくさんよいものがあつて惜しいので、今日は高太郎さん等が三人連れで行く。イワシ漁二、三日

前からかなりとれている。本陣の浜へ行つて見ると、吉井さんでは一生懸命網からはずしている。生売りや粕炊きをやっている。弥吉さんは、今朝佐渡へ帰られた。山行きの一行、五時頃帰る。竹の子沢山とつてきた。今日あたりから急に暖かくなり、夏シャツ、襟袢じゅばん、袴(あわせ)の三枚だけでよい。

▼六月一〇日

天気快晴、イワシ網が大漁で本陣の浜は賑やかだ。本年の結果から追々イワシ網が盛んになることだろう。正午から火防組合宣行行列があり、私も洋服で出かける。沢江、浜中、港町、入船町、丸山町、新地町と廻り、警察前で解散したがずいぶん疲れた。五時に帰る。夜八時からカ干場で、火防、衛生宣伝の活動写真があり、近いので家では代りがわり見に行く。見物人が大勢来ている。

▼六月一一日

起床六時、高太郎さんは午後一時の船で小樽に帰られた。私は九時頃、困主人、田さん、古島さん等と困の松林を見に行く。最初歌葉の山を廻る。それから桂の沢へ行ったが山林もずいぶん広い。一時

頃川原に出て、小雨の降る中握り飯の昼食をとる。腹がへつたのでおいしい。①公園へ出て、本道路から出戸の沢の山へ入り、三角山の中腹まで登りアチコチ見て廻る。ハイカラ山から下りて酒井さんで休む。ビールを飲み、帰つたのは五時だった。行程は四里ぐらい、小雨が降り寒い空であつた。

▼六月一二日

昨日の山行きでずいぶん疲れた。それでも六時に起床す。今日は天気快晴。チョッキリ虫や根ツキ虫が見えているというので、熊さん、鎌田さん、私とで虫落しをやる。ナシの樹に一番多くついている。白い木綿を広げて地面に敷き、一人が樹に登つてゆすつて落とす。上の畑のナシの樹では一本で一〇〇匹以上もいた。午前一一時頃に終わり、私は家に帰る。午後から妻は農園でカブなどの間引きをする。加藤内閣の親任式があり、閣僚が新聞に発表される。

▼六月一三日

起床六時、出面が五人来て、裏の流しじりをコンクリートにする仕事を始める。小雨が降り出したが大したことない。妻は支店に寄

り、禅源寺へお参りに行く。店はいたつて閑散だ、練製品は日増しに暴落、町中の景気は悪い。

▼六月一四日

起床六時、洗面早々浜へ出て見る。汽船が停泊している。浜伝えに本陣の浜へ行く。イワシ網船が接岸して陸揚げ中、魚はずしの出面が三〇人程もいる。この頃は毎日五〇箱ぐらいの漁獲があるとのこと。この分だと相当の漁になるらしい。群来村の白岩が来て網一〇〇間買つて行く。天気がよいので今日は衛生掃除をやる。熊さん、鎌田さん、妻とコノさん、それに私で一生懸命やつて三時頃終わる。

▼六月一五日

今日は朝から雨がシヨボシヨボ降り出す。長らく天気で蒔きつけたものも芽が出ないでいたが、この久しぶりの雨は良い。熊さんは群来村方面へ掛取りに行く。私は、佐渡の忠平からイワシ網が二個着いたが、改めて見たら目が細く、丈も短く、値段が高いので不向き、早速電信で照会する。②に寄りしばらく話をする。今日、青年運動会だったのが雨で延期とか。本鶴間へ遊びに行く。不景気話ばかりだ。沢

江の貸方で一、〇〇〇円あり、例年三分は引いていたが今年は一割引いてもらいたいとのこと。結局八分引きで受け取る。今年の漁ではこれも仕方ないだろう。

▼六月一六日

朝のうちは曇り空だったがだんだん晴れた。一日延びた青年運動会何か気が抜けたようだ。私は行かなかつたが、見物人は大勢行つたようだ。五時頃農園へ行く、リンゴ50号、開花が遅れていたがこの分なら大丈夫だろう。渡辺、このところずいぶん漁が良かったようだが昨年の大打撃で破産、一八日に家財道具のセリをするとのこと。少々突飛なことをやり過ぎてこの結果になったようだ。注意すべきことだ。

▼六月一七日

この頃は店もヒマだ。たまに行李か釣りのデグスを買う客が来るくらいだ。イワシ網の漁があり、この分だと来年からますます流行するだろう。午前中、新地方面へ行き田に寄りしばらく話す、どこへ行つても不景気の話ばかりだ。帰ってから田の畑へリンゴの花を見に行くと、58号はますます大丈夫らしいが、外のものはまだ定まらぬようだ。

▼六月一八日

天気快晴、リンゴはたいいてい大丈夫らしいので、そろそろ袋の準備をする。今朝聞けば農会の真崎氏、精神異常をきたして自殺したとのことだ。実に以外、人間は何時となくことになるか分からぬものだ。今日、渡辺さんで家財道具の競売がある。一時間程見ていたがセリもなかなかきびしい。夜、真崎さんへお悔やみに行く。

▼六月一九日

今日は朝から暴風が吹き砂塵が飛ぶ。渡辺さんの家財競売は今日もあるとのこと。世の中は一日増しにさびしく不景気になるばかりだ。午後一時から小学校で、札幌の阿部宇之八氏の国民精神作興に関する有益な講話があり、四時に終わる。五時から小樽税務署長の講話がある。夜、真崎さんの通夜に行く。

▼六月二〇日

昨夜来の暴風は恐ろしいばかりだ。店は閑散なことだ。真崎さんの葬式を送りに行く。まだ三四歳の若さで前途有為の士、惜しむべきことだ。午後から暴風はますます激しくなり、火防組合で巡回する。

▼六月二一日

起床七時、一昨日来の暴風は今日になつても止まぬ。町中は砂塵がひどい。店は閑散、一日増しに町はさびしくなる。この間から「ア」の貸し金のごとで皆が集つたが、どうも見込みがないらしい。債権者も何とか方法を講じなければならぬ。今夜は三山神社宵宮祭で芸者連の踊りがあるというので、境内は参詣人と見物人で沢山の人が集つて来ている。

▼六月二二日

先日来の暴風も昨夜あたりからようやく静かになつた。熊さんは農園行き、妻も午前中に行き三時頃帰つて来たが、リンゴの作はずいぶん良いようだとのこと。サクランボは昨年なつたから、今年はダメだと思つていたら上作とのこと。三時頃から袋はりを始める、家族総出で六千枚程はつた。三山神社の祭礼で町内を廻る。夜はまた賑やかな踊りがあるというので、妻や子供達とユキちゃんが見に行く。

▼六月二三日

長らく天気が続き、作物が枯れそうで困つたと思つていたら午後から大雨が降りだし、農家には実に

寒露だ。『の貸し方の件については原田さん、支店などといういろいろ相談する。

▼六月二四日

起床七時、昨夜の雨は晴れた。朝『の件について梅野さんへ相談に行く。中には強硬な人もいるので何とも困つたことだ。沖村の女鹿さんの次男、長らく病氣だったが小樽病院で死亡したとのこと、今日、葬式を送りに行く。午後から農園へリンゴの作柄を見に行く、58号、14号など玉が見えるようになった。いよいよ本物だ。幸治から久しぶりに手紙が来た。元気で勉強しているとのことだ安心した。

▼六月二五日

起床六時、先日来いたソイさんが小樽へ帰られる。気持ちもよく、申し分のない良妻だ。新夫婦の幸福と商売の成功を祈る。妻と子供等が浜まで見送りする。

▼六月二六日

起床六時、私は一〇時頃から入船、新地方へ行く、一〇〇円余り集金した。どこへ行つて話しを聞いても不景氣のことばかりだ。熊さんは今日から、鎌田さんとナシの袋掛けを始める

▼六月二七日

朝から雨が降る。掛取りには申し分ない日だ。熊さんは雨休みを利用して集金に出掛ける。一六〇円程あつた。六月になれば掛けはなかなか入金せぬ。小樽へ行った高太郎さんとソイさんから手紙が来る。知らない土地なので心細いとのことだ。

▼六月二八日

午前中は、昨日からの雨で農園行きを見合わせる。熊さんは午前中集金、午後から農園へ行く。『アのセリはまだ続いている。和合会の件につき原田、平田、大久保等のところへ行き相談する。今日、隆運丸で、新町一小田さんからみそ三〇樽が委託で送られて来た。とんでもないものを送られてきて困つたもんだ。

▼六月二九日

起床七時、熊さんは出面七、八人とリンゴの袋掛けをやる。リンゴの作が良いので賑やかだ。美国の長谷川から網を買ひに来て三〇〇間売。午後から新地方へ掛取りに行く。昨日着いた佐渡小田さんからの委託のみそ、七、八等に寄り話をする。

▼六月三〇日

月末なので支払いはくるが、集金の方は一向に入らない。こんな不景気もないものだ。熊さんは出面七、八人と今日もリンゴの袋掛けをやっているが、熊さんは摘果作業を専門にやっているので、良品ができるだろう。

▼七月一日

昨夜は大雨であつたが今朝はすっかり晴れた。しかし暴風が吹きリンゴの袋掛けを休む。和合会の決算のため一時から禅源寺和尚、(キ)原田、(ヨ)渡辺等に來てもらい協議する。三時に終わる。七時から禅源寺に会員が集り協議する。先の退職者には無配当とし、役員にも賞与なし、その残金一、三〇〇余円を配当する。二割を越える配当で上首尾だった。日米問題につき国威発揚、国土安穩の祈禱を全国の神社で行う。浜町では恵比須神社で祈禱があり一〇時に参拝する。戦争は実にイヤだ、平和であることを希望する次第である。

▼七月二日

起床七時、リンゴの袋掛け最中で、熊さんは五時頃から出かけている。今日も出面六人を頼んで58号を

掛けているとのこと。昨夜、和合会の配当が決定したので今日は皆に渡す。計一、三〇〇余円が一六名に配当になるので、皆思いがけぬことだと大喜びだ。

▼七月三日

ずいぶん暑くなりセルでも暑いようだ。学校前の借家は重助大工さんが來て一生懸命普請中だ。九日頃出来上がるとのことだ。熊さんは今日は出面八人と袋掛け、今日までに三万程掛けた、全部で一〇万程掛ける見込みだ。外に上の畑も三万くらいある。学校の門標が出来たというので見に行く、とうとう二年越しで完成した。幸治から手紙が來て下宿を替え、高太郎さんのところに行きたいと言ってきた。暑中休暇も近いので、それまで今までのところ居れと言つてやる。小田さんから送つて來たみそ三〇樽のうち、(ヨ)一〇樽、(キ)原田五樽預け、あと二五樽は倉入りだ。

▼七月四日

今日も袋掛け、熊さんと出面七、八人が行く。四郎を連れて浜へ出て見たが、ナギで浜の景色は特によい。この頃小網にマグロが掛かつて、今など思いがけない漁だといつて喜ん

でいる。梅野さんへ行き校門寄付金の決算をする。校門に五〇〇円余りかかった。佐渡小田さんへみその件について手紙を出す。父は四時頃から大洲向かいでセリがあるとかで行く。会席膳二〇人前で三七円四〇銭、ほか三点で四五円ほど買つて來た。佐渡の高野名弥平老人、今朝四時死亡との電報が届く。

▼七月五日

起床七時、リンゴ袋掛け最中で熊さんは忙しい。私はこのところ七八日は行っていない。ずいぶん大きくなつたとのことだ。雨を待っているが、暑くて、今日からは単衣一枚でしのぎやすい。蚊もポツポツ出してきた。小樽田、小林、木戸さん等が美国の帰り寄つたので昼食を出す。一時の船で帰られた。イチゴが出盛りになり子供等は喜んで農園へ行く。

▼七月六日

ずいぶん暑さがきびしくなり暑中の如し、白地浴衣でもよい。悦三は浴衣一枚でも暑い暑いと言つて裸で騒いでいる。三上町長がこの度退職し、札幌へ転居されることになり、今朝、富丸で出発されるというので見送りに行く。町会議員、その

他町民も見送りにたくさん來ていた。九時頃新地へ行く、銀行、佃などに寄り、(ヨ)で話をしイカで昼食を馳走になる。夏イカが大漁とのこと。大サバが吉井さんで大漁したとのこと、農園ではリンゴ袋掛けに一生懸命だ。佐渡信濃屋(ア)三綱の照会で打電したら「ミタシヨウチ 一三ト カニナワニ五イカ」ときた。

▼七月七日

起床七時、天気快晴、一〇時頃から急に暑さを感じ、寒暖計は八〇度F(二七度C)に上がる。風も強く砂塵を吹き飛ばしている。子供等は皆裸になっている、余り暑いので氷水でもほしい。夕方になってようやく風もおさまつてきた。今年になつて一番の暑さだ。リンゴの袋掛けも風が強いので午後は見合わせた。祭礼も近くなつたので、電気会社では町内の飾り電球の取り付けに一生懸命だ。町中では国旗を立て、夜は会社で赤や青の電球を七〇、八〇箇所も点灯したので、急に祭礼気分になった。私の家の前はまるで昼のようだ。

おゆうばあちゃん

大 澤 文 子

つづく猛暑に体温の低い私は熱中症にかかり、何日か氷枕の世話になった。が、ようやく朝夕涼風のたつ秋到来にホッと息づく。

いち早く木槿、紫苑、秋桜、月見草等々が雑草苑に作りだす秋のメルヘン……か。あまり広くもない庭面を「秋のメルヘン」と称しひとり歩み、秋を満喫するのも日課のひとつであろう。時には一夜の荒風に蕾のまま倒れかかった秋桜の小枝をそつと起こし添え竹に結ぶ。

秋桜の花言葉は「華麗・繊細・薄情でチョッピリ気の強いところがある……」でも、意外にたくましく、雨風に倒れても萎えたままの姿勢で立ち上がり花を咲かせる。控えめの女性、それでいて何にでも挑戦してゆける女性……のような花、コスモス。

そんな時、ふと思いだすのは「おゆうばあちゃん」のこと。おゆうばあちゃんは身寄りのない人で、若い頃より実家の家族

の一員として母の手伝いをしてきた。姉と私も新湯で生を享けたが、生まれた時からおゆうばあちゃんに可愛がられていた。もともと片田舎の尋常小学校の先生をしていたというおばあちゃん、母から聞いていた。

若い頃から「花の精」について執念にも近い興味をもっていたという。近所の子供達にも評判がよく、学校の休日には競つてわが家へ集まり、おゆうばあちゃんの花物語を聞きにやつてくるのだった。母はその都度、ビスケット、甘納豆、あめ等を円いお盆にのせ、子供達の接待をしていた。

「今夜の物語はネエ……」おゆうばあちゃんは両手を組み、あごをのせると細い目を一層細くして子供達をグルッと見回す。

おゆうばあちゃんの作りだす「花物語」は子供達の心をひきつけるのにそう時間はかからない。はじめから目を伏せ、下を向きもしもじ。

樹木の間から月の光が庭の石灯籠をホノリ照らす。

「今夜の物語はネエ、ある若者と、まだ年端もゆかぬある少女の物語なんだよ」

おゆうばあちゃんの目は一層細くなり、真剣なまなざしで聞く子供達グルッと見回す。

「若いふたりはネエ、いつも大河のほとりをゆつくり散策しながら手をつなぎ、いろいろ楽しい話をしているんだネエ、肩まで長くさげた少女の黒髪は夕風に揺れ、それはそれは美しく愛らしかったんだよ」

おゆうばあちゃんは少女の黒髪を手まねで教え、ふーつと息をついた。

「あの日はネエ、月夜の美しい晩だったネエ」

おゆうばあちゃんの花物語はつづいた。

「少女がネエ、ふと大河の岸边に咲く黄金色の花を見つけたんだネエ、若者に『ネエ、採ってエ、ほしいの』とせがんだのネエ、若者は気軽に『うん、いいよ！』と返事をして、大河の岸边に手をのびし一枝摘み取ろうとしたが足をすべらせ、アツという間に大河の急流に落ちてしまったんだよ！ 若者は一生懸

命急流と闘ったんだけどネエ、とうとう駄目だったネエ、若者は苦しい息の下から『いつまでも私を忘れないでネ！』と叫びながら、一枝の黄金色の花を少女に投げ渡し、力尽きて大河に沈んでしまったんだよ！」

「少女はネエ、身もよもなく泣きぐずれ、若者の投げてくれた黄金色の一本の花を抱きしめ、若者の名を呼びつづけたそう……」

月の出を待ちひつそりと咲く花……月見草。

語り終えたおゆうばあちゃんは、小声でそつと口ずさんだ。

「まーてーど暮らせーどこーぬひーとを」

宵待草のやーるせーなさ 今宵も月のでぬそうない おゆうばあちゃんはそつと目を伏せると、

「さあさあ、もう寝ようネー」と優しく子供達をうながし、それぞれ見送つてやるのだった。

あれから何年……月見草の咲く月夜の晩、おゆうばあちゃんは八十七歳の高齢をもって限りなき空へと旅立っていったそう……

いつの日か母が教えてくれた、そつと……

□ 参政権と自治

明治二年になり「市制・町村制」という法律ができたが、これには「北海道、沖縄県、その他勅令で指定する島にはこれを施行せず」とあつて、なぜか北海道には適用されなかった。ということは古平は郡であつて、まだ古平町ではなかつたということである。

翌三年には大日本帝國憲法が發布になり、一三年には第一回帝國議會が召集された。しかし、議會議員の選挙について、北海道は沖縄県・小笠原諸島とともに選挙権はなかったのである。

北海道の地方自治は、先の明治憲法でも認められず、北海道長官の権力下におかれた殖民地ともいえる状態であつた。このことが、北海道に住む人達が本州のことを内地と呼ぶ理由でもあり、これが習慣ともなつた。

義務教育にしても、北海道はまだ未開の地であるということからその就学年数も短縮され、また授業時数にしても少なかったのである。

しかし、北海道には北海道庁のおかれた札幌、北海道の玄関口として早くから発展してきた函館、海運の中心地でもあった小樽のように発達

した市街地もあり、北海道のことについて道民の意向や考えが無視されていると、道民の権利を主張するような運動も起きてきた。

明治三十四年、第一回帝國議會から道会（道議會）設置の要望がなされた。それぞれの区によつて要求は違つていたが、道会と合せて帝國議會の議員選挙権についても要求していた。北海道民には帝國議會への参政権も無かつたのである。

その後も参政権への運動は続けられたが、なかなか帝国議會で取り上げられることがなく、せつかく衆議院で通つても貴族院で否決されるという始末であつた。

このような中で明治三〇年、北海道区制、一級・二級町村制が勅令(明治憲法のもとで議会の審議なしで、天皇の権限としての命令)とし

ら施行され
た。このよう
に勅令から施
行まで手間ど

ったのは、かなり内容に改正が加えられた結果でもあった。

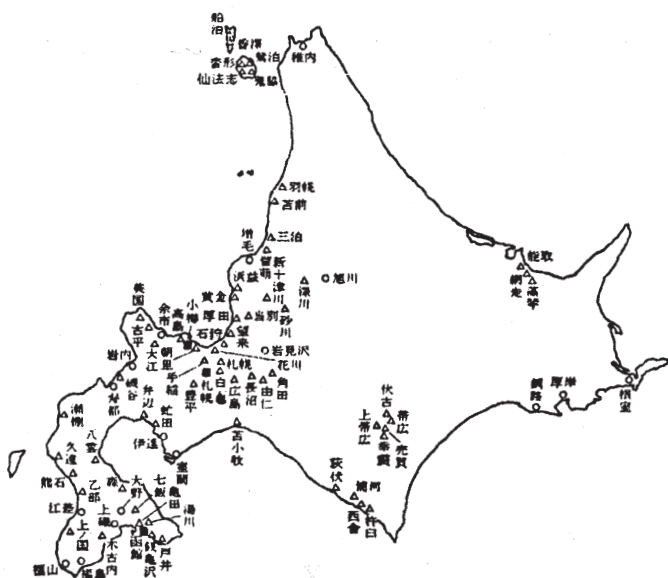
とにかく町
村の制度もあ
る程度整い、

一級町村に
ついては本州の
町村制と同様
になつたかと
思われたが、
町村における
自治権の範囲
については低
かつた。また

——蝦夷地から北海道へ——
地方自治の移り変わり

て公布された。そして、区制は明治三年から、一級町村制は同三年から、二級町村制は三五年か

二級町村制というのは北海道独特の制度で、公民権（選挙権や被選挙権）のように政治に参与する資格が

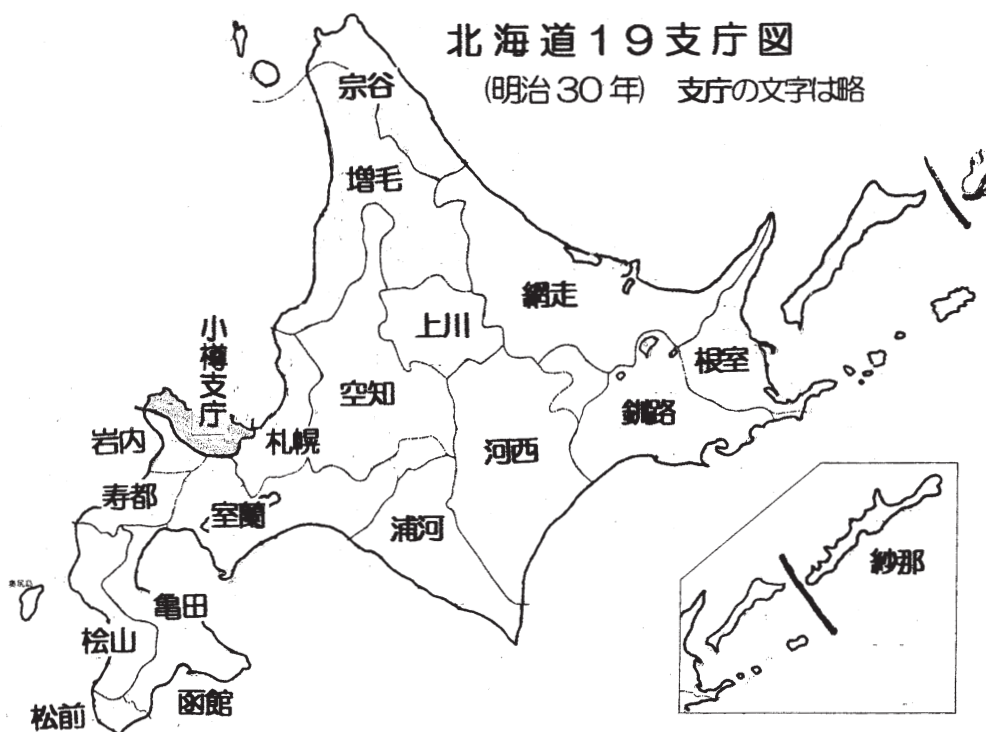


← 北海道の一・二級町村図（明治三五年）
一・二級町村に指定された地域を見ると、本道の西側、特に釧路などでは早くから開けた日本海沿岸部に多いことがわかる

与えられていなかった。つまり他府
県の町村並みとはいえない自治権
の弱いものであった。しかもその外
に二級町村としても認められない
明治初年以來の戸長役場によつて
管轄されている地域もまだ多く残
つていた。この戸長役場という制度
がすべてなくなつたのは實に大正二
年（一九一三）のことであつた。

北海道19支庁図

(明治30年) 支庁の文字は略



先の区制や一・二級町村制の勅令が出た明治三〇年、道庁の官制改革でこれまでの郡役所が廃止になり、全道を札幌など一九に区分してそこに支庁が設置されること

になった。古平を管轄していた小樽郡役所は小樽支庁となり、古平はその管轄になった。同三年、小樽に区制が施行されると小樽支庁から小樽区が除かれた。

支庁というのはここでは道庁の総合的な出先機関で、北海道の場合は全道を対象に置かれていて、その後改正され、明治四三年に一四支庁になってからは現在までほとんど変わっていない。

現在、支庁制を見直そうとする意見もあるが、長い間の歴史的なことや住民感情、地域の利害などからみて、改革となることは容易ではないようである。

□古平郡が二級町村

明治三年、一級町村制が実施されたのは次ぎの一六町村である。大野村・上磯村・福山村・福島村・江差町・寿都町・岩内町・余市町・増毛町・稚内村・岩見沢村・室蘭町・伊達村・釧路町・厚岸町・根室町だが、早くから鯨漁で繁栄した日本海沿岸の町村が多かった。

明治三五年(一九〇〇)二〇世紀を迎えたその初年に、古平郡など六〇か町村が二級町村制施行地に指定され、四月一日から施行されることになった。

古平郡でもこれにともなうて郡内の町村合併が行なわれ、沖村・歌棄村・沢江村・群来村・浜町・港町・入船町・丸山町・新地町など、それまでの町村名は大字として残るこ

とになった。

町長には前の戸長であった田村和六が初代町長として、北海道庁長官國田安賢から任命された。二級町村制の施行により、美国・積丹の二郡は古平郡の管轄から離れ、美国町・入舸村・余別村となった。

二級町村会議員についても、人口や町村内の状況により四名から一二名と定員が定められていた。古平町でもそれまでの総代制が廃止され、定員一二名の初めての町会議員選挙が行なわれた。

高野 平治

北海道古平郡古平町収入役ノ命ス

明治三十五年八月九日

小樽支廳

中 中
戦 戦泣き笑いの
樺太漁場体験記後 後
戦 戦

吉 野 慶 一 郎

密航を頼みに来たN氏と父との二人の対談は、N氏の温厚な人柄のせいか旧知のような和やかなものでした。

話をしている中で父は、N氏の視野の広い卓越した事業への信念と、偉大な実行力のあることに感銘をしたようでした。父

にしてみると、陸と海の仕事の違いはあつても同じ樺太に進出し、情熱を傾けて発展を期して

いたさなか敗戦により、築き上げた一切を失ったという悲運は人ごとではない。自分を重ね合わせた急に親近感を覚え、その再起を望む心からついに救出の約束をしたのでしょうか。頑固だが人のいいところもある、親父らしい勇気ある決断でした。

しかし鯨場を利用してのこの計画は、親父の病死によって引き継いだ私にとつても決行の寸前に妨害を受け、これで機会を

待っていたN氏は少々体調を崩してしまいました。私は早速見舞いに行き深く不首尾をお詫びした後で、

「もう一度計画を練り直して、必ず船を出すように努力しています。身体を大切にして、今少しお待ちを願います」

実は、まだはつきりした決め手もないままに船を出すなどと、その場しのぎに発言したことを後悔し悩んでもいました。

そこへ沿岸警備隊長の先の侮辱的な発言、私はこの一言に目覚めたように冒険へ踏み切る覚悟を決断しました。その暴言に報復するべく、必ずこれは成功させてみせると心に誓いました。

前回の失敗を反省し、周囲にはさとられぬよう充分に注意して、今回は一人で、神経を集中してその準備と計画を練り直しました。

まず見えない妨害者の目を欺くことです。そのために鯨場で使った船を修復のためいったん上架し休漁とし、船も別の小型船に取り替え、乗組員も全部新しく雇入れることにしました。

私は、密航を希望する多くの漁船員のいることは知っていました。その中の優秀なグループと密航の協力を得ることができました。早速集まって協議の結果、仲間で雑延縄漁をすることになり、新しく船頭になった渡辺船頭の名義で組合に出漁申請をしました。意外に早く許可が下りたのも幸運でした。この漁には、すけそう漁に使用した漁具が利用できるので都合

でした。吉野に全く関係のない渡辺名義の漁船が出漁を始め、ほどほどの雑魚類の水揚げもありましたが、ほかの漁業者達から特に注目されている気配もありませんでした。乗組員には、周囲の人達と仲良くしてくださいとだけ言っておきました。

樺太の夏の一方は深いガス(霧)で、海も陸も一面に覆われて視界を妨げます。ガスの濃い朝ほど日中は好天になるのも不

思議な現象です。私はこのガスを絶好の味方にして、日中堂々と船を北海道に向かわせることを考えていましたので、このことを船長達に話し、ガスと航行の関係をあらゆる角度から検討し、ガスをうまく利用し、これを克服できる自信のつくまで出漁しながら調査するよう提案しました。

一同もいろいろと試み、懸命に調査の結果、

「もう大丈夫、これで安全航海への確信がついた」

とのことで、決行日を定め、その準備を整えることになりました。

待ちかねていたであろうN氏には、決行の前日になってから知らせました。そして、かねてから協力を依頼して承知している、三キロ程離れたところの二丈舞の浜に住む、磯まわりのベテランである通称・山さんの家

に移ってもらいました。これは山さんの磯舟で、N氏を漁船まで送ってもらうことになって

いたからで、渡辺船長とも入念に打ち合わせをしていたことでした。七月十日、いよいよ決行の日が

生家のむかし川崎船に祖父行きて米穀雜貨小樽に求む
川崎船帰り来たれり薩摩芋バナナ菓子手鞠溢るる荷積み
船倉に多き鼠より網守ると住みつゝ猫に餌運びたり
船倉の奥に積まれし石垣の冷えびえとして吾は怯えき
船倉に納まる船の丈たかく乗るに術なし女わらし我は
海の面に篝火は映え沖揚げの声ひびきたり練来たれり

川崎船

瀧 内 優 子

初物の鯨の二尾を腹合はせ神に供ふる豊漁祈ると
幼かる我に容赦なく声のとぶ手許を照せ居眠りするな
新しきモツコににしん一二尾を負はしむ家継ぐ洋三歳
練来ぬ海に過ごせる五十年捨て難しと兄はにしん網持つ
練網の浮きに記されて今に残る堀清七とわが祖父の名は
荒磯に寄せくる波に首のべて鷗は今し飛び立たむとす

やつて来ました。この日はガスが深く、まさに天佑と言おうか願つてもない絶好の日和です。渡辺船頭に、

「Nさんをよろしく」と頼んですぐに船を離れまし

た。船は平常通り出漁の道具を甲板に積み、警備隊の点検を受けてゆうゆうと出港しました。船影はたちまちガスの中に吸い

込まれるように消え去り、順調なエンジンの響きだけが伝わってきました。

出港を見届けて番屋に立ち寄って見ると、中はきちんと整理し清掃もされていて、私に迷惑の及ばぬようにとの心遣いが感じられて嬉しく思いました。彼等の好意に感謝すると共に、航海の安全と無事を祈りました。

やがて正午頃、山さんが自転車で駆けつけて来て、

「安心してくれ、Nさんを無事に船に乗せてやったゾー」との嬉しい第一声でした。

「本当ですか、本当ですか：」

私の驚きの表情に、山さんは、

「ガスのおかげだよ。誰にも見られないで、打ち合わせしたとおりの時間と場所でピッタリ発

動機船と出合って、Nさんを間

違いなく乗せた。吉野さんによろしくと言って元気で行ったヨ。上ナギでおまけに追い風だ。この頃は監視船も全然姿を見せてないし、今頃はもうさうとう遠くへ走ってるはずだ。大成功だ、もう安心だヨ」と太鼓判を押してくれました。

ベテラン漁師の自信に満ちた言葉に、ようやく我にかえった思いでした。一步間違えれば悲惨な海難事故にもつながり、漁師達も恐れている危険なガスの海に敢えて挑戦し、何の狂いもなくすべて計画通りに成功したのは全く夢のようです。自分の考えが間違っていないかったことを証明してくれた、これは全員協力の賜物でした。紙一重の冒険にも、
『やれば出来るんだ!』
と言う親父の声が聞こえてくるようです。
(続く)

『札幌通信』をご執筆いただいた吉川義雄さんの奥様の計報に接し、心よりお悔やみを申し上げます。ご冥福をお祈り申し上げます。なお『札幌通信』の休載をご了承ください。

師走川陣地陥落

北極山へ撤退 〓 続き

北極山の手前でようやく大隊本部に追いつき、

浮穴曹長に師走川陣地の状況を報告した。曹長も最前線の不利な戦況は

分かっていたので、私達の安否を気遣

っていたらしく、

無事に帰って来た

ことを心から喜んでくれた。本部に

帰って来て驚いた

ことは、あの行方

不明だった中村正

道が生きているで

はないか。上の前

歯が一本欠けて唇

が大きく腫れ上がり、あごに大きな

ガーゼを当てて絆創膏で止めている。

「オーイ、中村どうした？ 俺

はお前が戦死したとばかり思っ

ていたが、無事だったのか」

彼がボソボソと私にことの顛末

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

34 桶 義 春

をはなしたことにすると、敵の砲撃で怖くて怖くて、タコつぼから一歩も出れなかったらし

く、一日中ジーンとタコつぼの中に潜んでいたが、

たまたま顔を出したところ運悪くすぐ近

く、砲弾が落下し、

破片が口に当たり負

傷したという。運の

悪い男だ。私のよう

に軍隊も三年兵とも

なると要領もよくな

り、変な度胸もついで

きて怖いもの知ら

ずになるが、初年兵

のも村は実弾を撃つ

たこともない。入隊

して半年そこそこの

兵隊では無理もない

だろう。

この頃、師走川陣地ではソ連

だが私としては自

分の中隊から連れて

来た兵隊で責任があ

る。可哀想だがみん

なの前で強く叱つておいた。途

中で休憩し大きなおにぎりが出

た。考えてみると、朝から飛び

回っていたので何も食べていな

中央軍道の西側を守備してい

た中隊長飛鳥中尉、速射砲の柿

崎中尉、歩兵砲の古山少尉の各

隊は、逐次八方山へ向けて移動

中に敵と遭遇、神無川を背にし

て包囲され、飛鳥中尉以下全員

が敵陣に突入し戦死した。

『停戦後大分経ってから、抑留

中の元七中隊の人達によって、

神無川の近くで飛鳥中尉と古山

少尉が、部下に囲まれるように

戦死しているのが発見されてい

る。将校用のバンドに飛鳥のネ

ームがあったと聞いている。周

囲には日本兵の遺体が五、六〇

体あり、国境警察隊も、隊長を

中心に円形になって一〇数名が

自決しており、それを見てみん

な涙を流して合掌したという。

これは捕虜収容所の中で加藤曹

長から聞いた話である。戦死し

て半年以上も、ツンドラの草原

に野ざらしにされている戦友の

無念さを思ったとき、今に見て

おれスターリンのクソ野郎め、

熱いものがグツと胸の中を稲妻

のように走った」

△続く▽

悠

雄詠「十一月号」主宰水見壽男

はまなすや昔渡舟場砂の道 山口悦子

香水に秘めごと秘めて年流る
リハビリやハンカチぐつと握りしめ
退院し暑中見舞に礼を書く

越野敏雄

流灯の船の追い濱離る
鳥のこゑ零るる妻の墓参
特訓に粹も身につき盆踊
香の匂ふ岐阜提灯に家紋かな

高橋重子

合歡のはな木目やさしきログハウス
夏潮のしぶきに水尾のすぐぐづれ
夏の峰たゆたふ波を車窓より
遠ざかる車窓より振る夏帽子
浜風を呼ぶ手作りの夏座敷

室谷弘子

雷一つ五臓六腑を貫きぬ
大夕立漁を半ばの戻り船
岩つばめ積丹半島ほしいまま
崩れては立ち上がりては雲の峰
日の火照り残して紅き夏の月
沖に出て戻らぬ風や秋近し

渡辺嘉之

雪溪をすべり来る風峽に消ゆ

《潮騒集Ⅱ招待席》七句

堀典子

風凧の沖にひかりの見えし秋
潮風のさらりと流る星月夜
波立つや海へ一気に向かふ風
大潮の匂ひ飛び来る岬の秋
海鳴を揺らすきりぎり秋岬
秋澄むや雄冬連山近く見す
初秋や重き波音くり返す
湧く雲の斜面を滑る晩夏かな
親子碑に笛の音届く祭かな
漁火や日本海の鳥賊を釣る
潮の香の風滑りくる月見草
夕風の出船の音の浜暮し
万緑の溢るる岬や帰り船
一湾の漁火遙か夏の月
いか船の明けの明星漁場を発つ
濃緑の稜線空へ際立てり
郭公の飴返ししの溪渡る
夏霧の流れ激しく沖にかな
連なれる峰万緑の海へ墜つ
風ぐ湾に八の字描く岩燕

越野清治

本間寿昭

怒涛

[4]

古平俳句会

—十一月—

潮騒も秋めく音と聞ゐたり 斉藤波留

秋夕焼神威岬を染め上げし

曼珠沙華帰りて見れば刈られをり 山口悦子

鰯雲うすれうすれて雨もよひ

緋連雀群れ翔つ冠の彩りぬ 越野敏雄

朝の潮満ちてダリアを供華とせる

秋茄子の色好く漬る朝餉かな 大和田絵伊

台風のそれで安堵の眠りかな

楚々と咲く野の秋草や雨に濃く 高橋重子

枝豆の青茹でしばし立話

孫の手を取りて踊の輪の内に 仲谷比呂古

初物は笑って食べる松茸

風立つて色出し切つて島の秋 室谷弘子

秋天のいよいよ高く透ける島

群れ舞ひし蜻蛉にまたも徐行せる 泉 清三

萩咲きぬ定年せまり通勤路

木々の葉が深く色づき秋蘭くる 外山俊久

老い二人逝きし娘の墓洗ふ

海渡る野分は波にならずして 渡辺嘉之

潮騒を花野に聴けず鳥のこゑ

一湾を茫々と霧とざしけり 堀 典子

満天の集魚灯や秋刀魚船

露草や広場の球児声光る 本間寿昭

鰯雲波高くある神威岬

滔々と大河連れ行く秋の空 越野清治

虫の音の夜陰に透る路地の裏

短歌

古平町岬短歌会

わが岬短歌会四十周年を迎へたり多くは老いしもいきいきと居り

池 田 テ ル

石北峠を越ゆれば北見変るなく広き畑の玉ねぎ匂ふ

鈴 木 時 子

沖に動くいさり火あればイカ舟か波間に浮きて無数に輝く

竹 内 コ ト

朝露を花に含みて咲き揃ふ紫式部の香りのやさし

田 中 香 苗

古稀すぎて元気に働く不思議さよ若き日の夫病弱なりし

丹 後 初 江

法要を終へて安らぎゆく墓参道に雀蜂の一刺しにあふ

寺 田 清 治

逝きし子の植ゑしコルチカム庭隅に今年も咲きて小春日

東 美 知

つづく
白萩の散りたるあとの枝の影ゆらゆら風に遊ばれてをり

堀 典 子

俳句

古平俳句会

頼り身の頼られをりし老いの秋 斉藤波留

長き夜や枕に愚痴をこぼしけり 山口悦子

秋の雨標識白し道の駅 越野敏雄

初秋の日毎に違ひ海の色 大和田絵伊

鰯雲神威岬もかげりをり 高橋重子

夜なべする母と宿題してをりぬ 仲谷比呂古

霧の立ち静かに深く透ける島 室谷弘子

名月や孫と眺めし遊園地 泉清三

秋深し小雨冷たい無人駅 外山俊久

海霧とても隠し切れざる岬あり 渡辺嘉之

台風や対岸の海雲のごと 堀典子

遠き子に荷造る蛙の鼻曲り 本間寿昭

磯波に足浸しをり星月夜 越野清治

教科書のいまゝむかし

◆特色のある国語教育

教科書の内容が児童の発達段階に沿うようにするため、教材となるものを児童の生活から取材しようとしても、それは児童の自然な生活というよりも、戦時下の小国民(戦時中に言われた小学生の呼称)としての生活が強調されるようになり、戦争へ向けての強力な国民の意識を育てる——ということに力が注がれるようになっていきました。

このような時代の影響を受けて、日本をたたえ、神や祖先を敬い、心身をきたえ、軍事に関心をもち、※大東亜の盟主として認識を与えるような教材が特に多くなつてきました。ことに高等科になると、軍事に関する教材、古典教材がぐんと多くなりなりました。

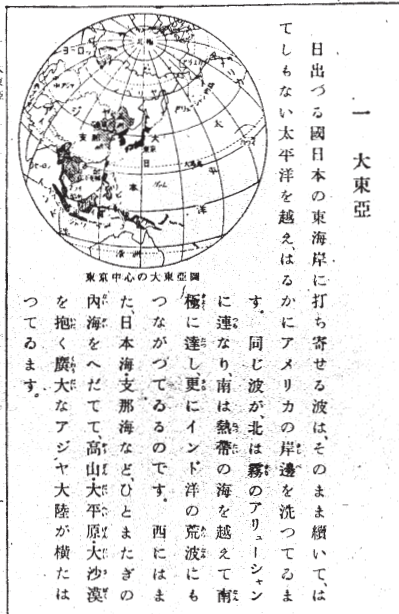
※ 大東亜＝日本が唱えたアジア政策の中で、日本・満州・華民国(中国)を中心に、インド・ビルマ・タイ・オーストラリアなどを含む地域を指した言葉
こうして

← 国史教科書・一、大東亞（六学年用）

戦時下で特

有の国語教科書が編集されましたが、教材をどう扱うかということについては、指導上の新しい考え方もとり入れられていま

した。



すことなどと「こと」＝活動が
日常の生活体験から指導される
ように、国語の授業は、広い立場
から言語教育に努めなければな
らないということです。

そのために三学年以上の教科書には読本という文字が無くなり、「ことば」の教育が重くみられるようになったことです。これは国語教育の大きな変革であったといふことができます。

また、この期の修身教科書(国民科)は、第一学年・上では『ヨイコドモ』、下では『日本ノ国』でした。

日本ヨイ国 キヨイ国

←習字の文字もすっかり軍国調となりました。(六学年用)

日本刀
大和魂

軍用犬
少年兵

世界二ツノ神ノ国

日本ヨイ国 強イ国

世界ニカガヤク エライ国

高学年になるとさらに強くあらわれ、建国の神話を歴史上あつたこととして教えました。なお「軍神のおもかげ」として、飛行隊長として活躍し戦死した加藤建夫少将、「特別攻撃隊」では九軍神などが身近な例として児童に示されていました。

戦前の第一と五期の国定教科

書を全般的に比較して見ますと、第一・二期の明治の教育は修身が中心で、第四・五期の昭和の教科書は皇国という考え方からみた国史が中心であり、大正時代の第三期は修身中心の明治から、国史中心の昭和時代への過渡期にあつたといえます。

◇修正を繰り返した理科

国定教科書の制度は明治三六年に定められて、翌年から実際に使用されましたが、最初は理科の教科書は国定ではありませんでした。そればかりか府県(北海道も)で児童用教科書を決めることも禁止にしました。これは理科教科書の必要を認めなかつたということです。

しかし、明治三九年に小学校理科教科書編集委員会を設けて、第五・六学年用教師用書を各一冊を編集し、四一年度から使用することになりました。その後、児童用についても要望があり、文部省でも、児童用として理科筆記帳などが広く使われている実情などから、四三年に規則を改正して理科を国定に加え、四四年

度から使用されることになったのです。

理科の教授する内容も改正されて、第五学年では「植物、動物、鉱物および自然の現象」のほかに「一般的な物理・化学上の現象」が加わり、第六学年ではさらに「人体生理の初歩」という内容が加わりました。

このような動植物・鉱物を内容とする教科を一般に「博物」といっていますが、このような博物中心を改めて物理・化学や生理の初歩を内容に加えて、義務教育終了までに理科の全般について取り扱うようにしたことは新しい考え方でした。

教材の選択と配列については、第五・六学年の二か年で、まず理科の全般についておおよそのことを教え、そのために身近にある材料を選んだこと、難易の順序を考えたり、季節やその他の事情を考え合わせて、配列にも考慮をしていたことがうかがえます。

そして植物・動物については、主として東京付近にあるものの中から選択しているので、土地の事

情によって適当に取り扱うようにとしています。

理科教科書は、他の国定教科書にくらべてひんぱんに修正されていて、その要点として次のように述べています。

1. 教材と季節との関係をなるべく多くの地方に合うようにしたこと

2. 簡単に実験などが出来るように工夫したこと

3. 観察に使う材料はなるべく多くの地方で得やすいものにしたこと

4. 用語や文章はやさしくして、なるべく具体的にしたこと

5. 読本などで習っていない漢字はさけて、かなを多くしたこと

6. 児童が興味を持って学ぶことができるように配慮したこと

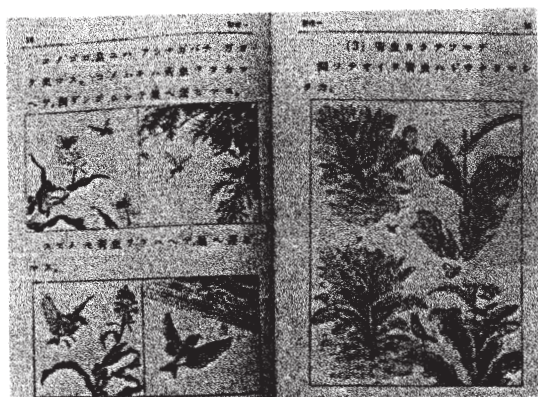
そのためにページ数も増えて、第五学年では、最初が五七ページだったものが八四ページになり、六学年では四九ページから七二ページとなりました。

このことは教師用書にも見ることができます。全国的な見地から代表的な教材を選び、鉱物や岩石など得やすいものはあらか

じめ採集しておくこととか、また器械や装置の簡単なものは学校で作っておくこと、なども記述しています。

大正八年小学校令が改正され、理科は第四学年からと一年早くなり、これによって第四学年の理科教科書が新しく編集されることになりました。しかし教科書が編集され実際に使われたのは、その年に入学した児童が第四学年になった大正一一年度からでした。

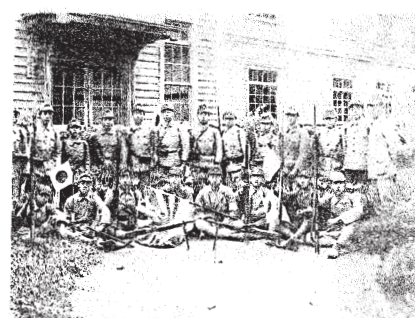
←理科・青虫がチヨウに変わるまでの観察(四学年用)



古平町史年表

昭和16年(1941)～ 続く

- ▲鮮魚・魚介類の配給統制規則が公布される
- ▲各町内会に各戸への配給業務を担当する産業部長をおく
- ▲明和青年学校が明和国民学校に併置される
- ▲警察からの要請により古平・美国の3劇場と余市町の興業関係者で映画演劇協会の下部組織が結成される
- ▲婦人会の協力により、毎月乳幼児の健康診断を行なう
- ▲町内に伝染病が多発する(罹患者26名中ジフテリア23名・内3名が死亡する)
- ▲青年学校女子部を開設し、古平国民学校に併置する
- ▲稲倉石鉱業所が私設の青年学校を開校する
- ▲小樽税務署管内での郡部家屋賃貸価格調査委員の選挙が行われ、古平町から越中庄七が選任される
- ▲余市～古平間の定期バスがガソリン不足(ガソリンの配給が止まる)のため運行を休止する
- ▲自家用自動車のカソリンが使用禁止になる
- ▲でん粉アメの製造講習会が役場で開かれる
- ▲後志支庁から講師が来て、役場でみそ・しょう油(魚醤)製造の講習会が開かれる
- ▲古平青年学校後援会が発足する
- ▲国民労務手帳法が実施になり、これには身分・経歴・技能程度・賃金などが記入され身分証明書代わりでもあった
- ▲町内で組織された勤労報国隊が稲倉石鉱山へ動員される
- ▲水難救済会沖支所が廃止になる
- ▲国民勤労報国協力令が公布され、勤労奉仕義務が法制化されたことで町内でも勤労報国隊が結成される
- ▲道庁や支庁、職業指導所から係官が来町し、商店経営者の重工業や食糧増産関係への転業を紹介する協議会が役場で開かれる
- ▲大東亜戦争(後に第二次世界大戦)が始まり、当日、児童や各団体が参加して琴平神社で戦勝祈願祭が行われる
- ▲開戦による町民大会が古平小学校で開かれ、宣戦布告の書を奉読し町長などからの挨拶がある。ラジオのあるところには人が集まりニュースを聞く



↑ 古平青年学校生徒の軍事訓練



↑ 米英との開戦を伝える新聞



↑ 児童が琴平神社へ戦勝祈願